
鼠の世界にとりっぷ！

Wanda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼠の世界にとりつぷ！

【Nコード】

N76140

【作者名】

Wanda

【あらすじ】

「猫の世界にとりつぷ！」様（<http://ncode.syosetu.com/n68290/>）から始まった動物王国シリーズへの、参加作品です。

（前書き）

猫好きとしてツボにはまった作品の作者様が、ほかの動物Ver.も募集しておられたので、調子に乗って書いてみました。

天国のお母さんへ

こうして手紙を書くのは初めてのように入います。

長い間墓参りにも行かなかった私が筆を取ったのは、ひとえに日本から遠く離れてしまったからです。

なぜここへ来てしまったのかは、よく分からないままです。考えられるとしたら、バイト先のファーストフード店の裏で毘にかかつていた、小さな生き物に憐れみの心を抱いたことでしょうか。

とは言つても、何ひとつ不自由なく暮らしているのでご心配なく。唯一気になるのは伝染病くらいなものです。

今頃、アル中のクソオヤジは、一人娘の失踪を受けて世間から散々攻め立てられているでしょう。ざまあみろ。

これからは、私のことを知る人が一人も居ないここで、新しい人生を歩んで行こうと思います。

あなたがおしとやかにあれと付けてくれた名前に反している、百合より

出す先が分からないそれを、封筒から出してまた読み返す。自分の胸に押し当て祈るように目を閉じてから、元通りに仕舞ってよしと立ち上がった。

鏡に映るあたしの格好は、今日も全身を一分の隙なく覆う紺色のワンピースにエプロン、頭にはドアノブカバーに似た帽子。クラシックなスタイルのメイド服は、このお屋敷のお仕着せだった。

そろそろお昼の休憩時間も終わり、と与えられた個室を出て屋敷の二階にあるご主人様の部屋へ向かう。台所の隣の元倉庫から吹き

抜けの玄関ホールに出た時、目の前を茶色い生き物が横切って足を止めた。

向こうも、後ろ足で立ち上がり鼻をひくひくさせてこっちに注目している。くりくりした黒い目と見つめ合うことしばし、その愛らしいプレリードッグはたたたとどこかへ走って行ってしまった。去った方をぽーっと見つめていると、どこから声かけられる。

「よだれを拭け」

「えっ」

手を上げ、甲で拭きかけ指先でぬぐい直す。お上品にお上品に。よだれ垂らしてる時点で上品じゃないというつつこみは受け付けません。

二階へ続く階段を下りて来たご主人様は、目の前に立って開口一番「遅い」と言う。

「いつまで休憩しているつもりだ」

「申し訳ありません。故郷のことを思い返してたら、少々……」
そのあたしの言葉に、すぐ「そうだったか」と申し訳なさそうな顔をする。ちよろいもんだ。

内心ほくそ笑んでいたあたしの耳に、冷たい声が届く。

「ジェラル様。何あっさりだまされてるんですか」

プライベートで使う食堂の方から来たのは、あたしと同じメイドのお仕着せを着た女の人だ。歳も同じくらいに見えたから、最初は仲よくなれるかな、なんて思ってたんだけど。

「この小娘のことだからサボってたに決まってますよ。『落人』（おちゅうど）だからって甘やかさないで下さい」

亜麻色の硬い髪を一つにひつつめたエリスは、つかつかこちらに寄って来ると目をすがめてあたしを見る。

「ご主人様が居なければ食べる物にも困るくせに、まあなんてふてぶてしい。早くここから出て行きなさいよね、この役立たず」

「エリス、彼女は……」

何か言いかけたご主人様に構わず、あたしはふんとあごを上げる。

「お言葉ですが、あたしとあなたがやっている仕事、一体どこが違うんです？」

「二人とも」

「それに、ここで仕事をお与え下さっているのはジェラル様ですよ。主人の采配に、あなたが文句を言っているものなんですか？」

言つてご主人様を見ると、「いや、エリスは」と苦い顔で何か言いかける。その前に、エリスがまた食つてかかつて来た。

「わたしはこの使用人を束ねる頭です。サボっているメイドをたしなめるのもわたしの役目。文句を言う方が間違っていると、どうして気づけないんでしょう」

「二人しか使用人がいないって言うのに、どうしてそんなに威張り散らせるんですか？ まあ不思議。ああそうですよ、自分の家の中だけなら、いくらでも好きに言えるんですよ」

「ここは私の家だが」

「ええそうよ、ご主人様のお屋敷よ。唯一絶対たるジェラル様がいらっしゃるからこそ、わたしはその威光を振りかざすことができるのよ」

「何か間違つてないかそれ」

「ぼそぼそつっこみを入れるご主人様の声を聞き、あたしは更に言い募る。」

「だから、どうしてまったく同じ立場の同僚に、そこまで威張れるんですかって聞いているの。いくら先に働いていたと言っても、やっている仕事は同じでしょう」

「あれさつきもこれ言つたかな？ でも返すエリスの口は止まらない。」

「日がな一日、本性のわたしたちを見ながらニヤニヤすることが、あなたの仕事だと言ひ張るのね。本当、『落人』つてのは便利な立場ね」

「ええ、あなたには分からないでしょうね。この、故郷を遠く離れ、帰ることができない寂しさは」

ここの人たちから見れば、一番の弱みになることをさらけ出す。これを言えば、ご主人様はかわいそうにという顔になって口出しをしなくなる。のに。

「あなたさほど寂しいと思ってないでしょう。むしろ新天地だって大喜びしてますでしょ？」

「あら、そうかしら？」

言いながら、その通りだったので内心ハラハラする。ばれてしまったら、弱ったふりしてのサボリが使えなくなる。

「どうでもいいこと話してないで、そろそろ仕事にかからないか？」

『ご主人様は黙って下さい！』

横から口を出して来たご主人様に言ったあたしとエリスの声がぴたり重なり、お互い気まずげに視線を交わす。そして、同時にふいとそらした。

階段の手すりの陰にいた居候のハムスターたちが、米粒が落ちた音のようなかすかな声でぶちぶち話す。

「お前たち、あれを『ケンカするほど仲がいい』っていのよ」

「へえー母ちゃんもの知りー」

『違うから！』

またしてもハモリ、そばにいたご主人様がくつくつ笑った。

バイト二本を掛け持ちして朝から晩まで働いているあたしは、ある日ある夜、金属製のはずの下水へのふたをバキッと踏み割り、気がついたら草原のと真ん中で青空見上げて寝転がっていた。

考えられる理由は、出せない手紙に書いた通り、ネズミにかわいそうという目を向けたこと。都会のと真ん中でもネズミは結構いてしかも二十センチはあるような黒い大きな姿だったりするので、誰もが「かわいい」「かわいそう」よりも「不気味」という感想を抱く。

でもこいつらも同じ生き物なんだよね……ペストだとか実験体だ

とかで、いっぱい殺されて来たんだよね……なんて思ってた一歩足を踏み出したら頭から真つ逆さま。お笑い番組もびっくりだ。

その後のっそり現れたでっかいネズミ……カピバラたちが来い来いと服を引つ張るので、ニヤニヤしながらついて行ったらそこにあったのは白い外壁のロマンチックなお屋敷。そして、見た目二十歳程度でちよつとへたれな我らがご主人様・ジェラル様だった。

なんでもここには、しよつちゅうあたしが居た世界から人が『落ちて』くるらしい。『落人』と呼ばれるあたしのような人たちは、元の世界の知識や技術を期待され、たいそう歓迎されるのだとか。でもあたしはしがない高卒フリーター。家電がなくてもできることといえば、靴下に開いた穴をつくろうことと笑顔を振りまくことくらい。

とりあえず仕事が見つかるまでという条件で、最初にあたしを拾ってくれたこのご主人様——ジェラル様の元で暮らし始め、早半年が経つ。最近はエリスとのやめる・やめないのやり取りも定番化してきていて、もう意地でもここを離れるもんかという気分になっていた。

そんなあたしが午後イチに任されたのは、子カピバラたちのエサやり、もとい食事の世話だった。さつきエリスが居たプライベート用の食堂に群れている、ひざに載るくらいのカピバラたちに、菜っ葉や根菜をそつと差し出す。

するとゆっくりした動きで寄って来て、もっさもっさと食べ始める。

とろーんとした、今にも寝そうな顔で。

もきゅもきゅ。

もさもさ。

「よだれ」

「おおつと」

つつこみに手の甲でぐいっとなぐい、気づく。

「あらやだご主人様。いらっしやっただんですか」

あわててしなを作ってみたけれど、ふぬけた顔はばつちり見られちゃってるはず。ご主人様は特に気にした様子はなく、隣にかがんでさっきエサを食べていたカピバラに手を伸ばした。腰の辺りをわしわし触って、ごろんと寝転がる姿を見て目を細める。

と、あたしの口元を指で示した。

「百合、よだれ」

「あれ」

駄目だ、このスローな巨大ネズミたちに囲まれてると理性がとろける。じゅうたんの上に腰を下ろしたご主人様は、ヘヴン状態になっているカピバラを膝に抱え上げるとあたしの方を見た。

「明後日はラヴィツシュ殿のところへ行って来る」

いきなり出た名前に必死に思い出して、ようやく思い至る。

「ラヴィツシュ殿って、虎の方でしたっけ」

この屋敷の外に広がる果てしない草原には、ほかにここみたいな動物ランド（正確には違うけど）がたくさんあるらしい。その一角を収める『上位種』の名を呼んだご主人様は、うなずいて続ける。「最近立て続けに若い娘が落ちてきているのは、あちらがきっかけではないかと聞いたからな。縁遠い相手だが一度話を聞いておこうと思ったんだ」

「げっし類が猛獣に会いに行つて平気なんですか」

聞くと、目が方々を泳ぎ出す。まずいらしい。

「ま……まあ我々はいいい感じに共存しているから大丈夫とは思うんだが注意に越したことはなく念のために似たような種族っぽい兎殿の協力を仰ぎたいところだがあの人苦手だからやっぱり俺一人で行かないと駄目なんだろうけどやっぱり無理だ行くのやめようかはははは」

「落ち着いて下さい」

カタカタしながらしゃべり続けるご主人様を止め、その顔を覗き込む。

「もしあたし関係で行くつていうなら、そんなことしないでいいで

すよ」

案外整っているその顔の、黒い目をまばたかせて不思議そうにする。

「故郷の人間と会いたくはないのか？」

「あたしは、あまり」

何せ家がアレだったので、普通の子と合わせられるような会話が思いつかない。小さい頃の記憶なんて、薄い壁越しに隣の家から伝わって来るテレビの音に、必死に聴き耳を立てていたことだけだし。「もし会いたくなったら、自分から会いに行きますよ。ここ、ここも治安いいんでしょう？」

「まあ、若い娘が独り旅しても平気なところではあるな」

言って何か考え、ふっと笑う。

「鞭の女王は、百合と気が合いそうだな」

ムチって、その人もあたしと同じ落人？ というかあたし、これでも猫かぶってつもりなんだけど。本性ばれてる？

うつんと首をひねった時、子カピバラのひとりが縮こまってぶるぶるしていることに気が付いた。心配で近寄ったあたしにつぶらな目を向け、その子はちまつと言った。

「にいさま」

「ん、どうした」

ご主人様が気づいて顔を向け、ひざに載せていた子を下ろしてこちらに来る。

「あたし……あたし……、きゅう！」

かわいらしい悲鳴の後、その子はぱあっとまぶしく光る。思わず目をつぶり、開けた時には小さな女の子がそこに居た。

「わ！ 服服！」

体を丸めているその子へ、ご主人様はすぐに自分の脱いだ上着をかけてあげる。あたしは食堂を出て、一階奥にある衣裳部屋へと走った。

「百合さん？ どうかしましたか」

途中でエリスとばったり会い、足を止めないままに伝える。

「一人、転化しました！」

「まあ」

エリスがばたばたと食堂へ向かう足音を背中に聞きつつ、衣装部屋へ飛び込んであの子が着られそうな物を探す。ご主人様と同じ枯草色の髪をしていたから、服の色も落ち着いた物の方がいいかな？ そうウール製ばかりの服を選びながら、ふと我に返って手を止め、気を取り直してまた作業にかかる。もう当たり前のように慣れているけれど、最初にあれを目の当たりにした時は腰を抜かした。動物が人になるなんて、ダーウィンが来たらびっくりだ。

ここにうじゃうじゃ居る動物たちは、実は動物じゃない。皆、人に変身できる、『上位種』と呼ばれている者たちだ。

その辺でぬぼーっとしてるカピバラとか物陰にひそんでいるプレリードッグとかポットの中で寝ているヤマネとかが、皆みんな人間に変身できるらしい。

納得できるか！ と思ったけれど、目の前でプレリードッグが人間のメイドに変わってくどくどしゃべり始めたんだから、信じるしかない。

そんなメイドのエリスは、新しく人に変身できるようになった小さな女の子を安心させるようになでなでしていた。う、うらやましくなんてないんだからね。

扉のない部屋の入り口に立つあたしに気づいたご主人様は、にっこり笑って言う。

「持ってきてくれてありがとう。悪いが、二人で着せてやってくれ」
エリスと目を合わせ、同じようにししぶしぶ答える。

『分かりました』

また、ハモってしまった。

一日の仕事が終わり、屋敷の裏手にある露天風呂でぼけーっと星

を見上げていると屋内に続く扉がカラカラ開いた。プレーリードッグたるエリスは、水が苦手なのでここには絶対に来ない。来るのは人間のあたしとカピバラたちだけで、この遅い時間に来る人は一人しかない。

「痴漢ですよご主人様」

そちらを見ないまま言つて、そばに置いてあつた大判のタオルを浴槽に引っぱりこむ。思い切り体に巻き付けて肩まで湯船に沈み、ちらとそちらを伺つた。

短い手足でもっそり歩いて来た大人の、メートル以上もあるカピバラは、「雇用者権限はこういう時に使うものだよね」とあたしが居るのは反対側から湯船に滑り込む。

「ちくしょー」

小声でつぶやき、水面をぱしつと叩く。もし人型の時だったらマツハで叩き出すのに、お湯につかつてまったり目を閉じているあの愛らしい生き物は、邪険にはできない。ご主人様はへたれの割に時々大胆だ。

獣と同じ湯につかりながら、また夜空を見上げる。人工的な明かりがほとんどないおかげで、ここは晴れていれば手で掴み取れそうなくらい星が見える。

「あ、流れ星っ！」

「ん？」

言う間に消えてしまった。いつか「金」を三回唱えるつて決めているのに、なかなかその機会は来ない。

ふと不思議に思い、対岸で目を開けたラヴリーなひとに声を掛けた。

「ここつて流れ星に願い事言つんですか？」

「さあ？ 私たちは祈らない。願いは自分で叶えるもんだろ？」

おお、気障つちいことを言つて下さる。

くすり笑つてもう一度上に目をやった時、湯の表面にさざ波が立った。ゆつたりつかつていたカピバラさん……もといご主人様が、

ついーつと泳いでこっちに来る。短い手足をばたばたさせて泳ぐ様は大変かわいらしい。でも。

「ストップ。半径二メートル以内に寄らないで下さい」

片足を上げて止めたあたしを見て、ルートを変えると広い浴槽の真ん中辺りの縁に行く。そこにあごを載せて、また目を閉じた。ああ、あの頭の上に畳んだ手ぬぐいを置きたい。

「百合は最近、取り繕わなくなってきたな」

足で止めたことを言ってるんだろうと思い、へへと笑う。

「さすがに飽きてきちゃいました」

せつかくの新天地だから優等生キヤラを演じようと思っていたけれど、うん、無理。

「ちなみにさつき、もろに足が見えたぞ」

からかう口調で言うご主人様に、真っ向から球を打つ。

「人間相手に発情してる場合じゃないでしょう」

「はっつ！？」

うぶなご主人様はあたしの言葉に絶句した。

「後継ぎとかいいんですか？ エリスさん一人じゃ物足りないですよ」

カピバラ、ついでにプレーリードッグもかわいい顔してハーレム作る生き物で、屋敷にうじゃうじゃいる子カピバラたちは皆ご主人様の母親違いの弟・妹なんだそう。先代の主人が亡くなった時、今のご主人様がまとめて引き取って、せつせと世話を焼いているらしい。

そして、人の形を取れるようになった子から、それぞれ仕事などを探して独り立ちさせている。できたお兄ちゃんだ。一人すら育てられなかったうちのオヤジに、足の爪を飲ませたい。垢じゃなくてこの人もじきにハーレム作るんだろうなと思いながら、あたしはニヤニヤ笑う。

「別にあたしを襲ってもいいですよー？ ただしその時は、慰謝料大枚ふんだくってやるのでー。覚悟しておいて下さーい」

わざと相手を煽るように言うと、ご主人様はそのままお湯から上がってしまった。ぴっぴと足の水気を払い、おしりふりふり脱衣所の方へ向かう。お湯がかかりますってば。

怒っちゃったかな、と思いながらもまったり目を閉じていると、ぺたぺたと足音がした。そして、肩をぐいっと引かれる。

逆さまから覗き込んだご主人様は、人の顔で笑う。

「合意を得ていれば何の問題もないわけだ」

「寝言は寝てから言って下さい」

タオルの端をぎゅっと握りしめ、指をピースにして突き出すと避けられた。あつ、必殺目つぶしが！

素っ裸にタオル一枚の、さすがに目のやり場に困る格好の人はほがらかに言う。

「寝言にしていられるかは、百合次第だよ」

そして、また脱衣所の方に歩いて行ってしまった。

一人になり、ぶくぶく顔の半分までお湯につかりながら思う。まさか今の、告白だった？ そんなわけないか、ハーレム作る生き物だし。

そう自分に言い聞かせて、ドキドキする心臓をなだめてまた夜空を見上げた。

空の上にいるお母さん。今日も異世界の星はきれいです。

おしまい

（後書き）

あまりほかの方の登場人物を出せなくてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7614o/>

鼠の世界にとりっぷ！

2010年11月12日21時10分発行